

## 知財の広場

### 寓話の中のヒント

先日、毎日新聞に連載中の海原純子さんの「新・心のサブリ」に、ホルヘ・ブカイ氏の「寓話セラピー」の作品の内容が載っていました。読まれた方もおられるかもしれませんが。

記載されていたのは、「生クリームの中の蛙」の話。また引きですが、少し内容を説明しますと。

昔、生クリームの瓶に落ちてしまった2匹の蛙の話である。

2匹ともしばらくすると自分たちが沈み始めていることに気づく。

生クリームは濃い液体で浮いているのが難しい。手足をばたつかせて浮く努力をしていたが、すぐに沈み顔を出すのが難しくなってきた。

1匹は「こんなことをしてもどうせだめだ」とあきらめ沈んでいった。

もう1匹は「いくら死が迫っているとはいえ最後まで生きんるだ」と足をばたつかせた。重い液体の中ゆえ、同じ場所で足を動かし続けていた。

するとさんざん足を動かしたために突然生クリームが固まってバターになり、その蛙は驚いて跳び上がり瓶の縁に飛び移り瓶の外に出て行ったのだという。

海原さんの題名は「精いっぱい生ききる」であり、コロナ禍において、『「どうせやってもだめ」と思ったり、「もう年だから」と年齢を言い訳にしたりして努力を放棄する傾向がある時のヒントが隠れている』と、海原さんは書いておられます。

ここで、知財の話になりますが、当 INPIT 滋賀県知財総合支援窓口に、特許相談に来られた相談者のアイデアを「特許情報プラットフォーム」で一緒に先行技術の調査を行った際に、そのアイデアと同一もしくは非常に近い技術内容が見つかることが多々あります。その場合には、そのままでは権利化はできない旨を助言することになります。

但し、その相談者には、「これからがスタートである」ことを説明し、現在のアイデアの課題を見つけてその解決手段などの工夫などが発明となる可能性が大きい旨を伝えています。そのまま諦めてしまったら、発明には結び付かないと。諦めない「もう1匹の蛙」になることをお勧めします。